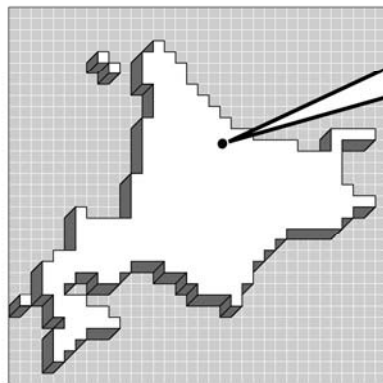


## 連載 わがマチの自慢 No.3



## 滝上町

— 五感で感じるまち —

香・彩・触・味・音

## 1. 花香るマチ

滝上町は、オホーツク海と大雪山系に囲まれ、森林が九〇%を占める林業・農業の町である。町名はボンカムイコタンと呼ばれる所の滝の上にある事に由来する。

滝というイメージより、春から初夏にかけてピンクのじゅうたんを広げたような景色と甘い香りに包まれる町並みが目に浮かぶ。

「芝さくら滝上公園」の芝さくらは北海道でも一番の名所である。昭和三四年頃に、みかん箱ひとつ分の苗を公園に植えたことからスタートし、いまでは、一〇万平方メートル（札幌ドームの七倍の広さ）と日本最大級の大群落に育てられ、北海道自然一〇〇選や北海道まちづくり一〇〇選にも選定されている。丘陵公園に美しく映えるためには、雑草や欠株は禁物である。町民のボランティアと行政が一体となった、数十年にわたる日々のたゆまぬ管理の賜物と感嘆するばかりで



滝上公園を中央に望む町並み

ある。オホーツク花回遊と称し、近隣市町村の花の名所を巡るスタンプラリーを開催するなど、花のまちとしての観光も定着している。道内・道外はもとより、近年は、台湾・タイ・マレーシアなど海外からの観光客も増加してきている芝さくらまつりは五月から六月の一大イベント

トに発展している。

花の香りや織りなす情景の美しさが体感できることは、この町の自慢すべきひとつである。

## 2. ハーブ香るマチ

滝上町が、ハッカ生産量日本一であることをご存じであろうか。

滝上町のハッカ栽培は、明治四三年より始まったと言われている。耐寒性があり、土壌を選ばず丈夫で育てやすく、価格もよかつたことから、最盛期の昭和十



↑ハッカ畑



←ハッカの蒸留作業

一年には、一、二四haと町内の畑地の四分の一を占めるほどであった。北見を含めたこの地域のハッカは品質も高く、国内有数の一大産地であった。一時は世界の七〇%を占めるに至った国産のハッカも、その後、海外産の天然ハッカや合成ハッカとの競合で価格は下落し、作付面積も大きく減少することとなったのである。

町の現在の作付けは、一〇ha規模となつてはいるが、日本全国の生産量の九五%を占める産地として今なお健在である。一〇数名の会員によるシソ・ハッカ生産部会で伝承され、精油のための蒸留作業も一貫して継続実施し、今後さらなる生産拡大や商品開発・販売へと精力的に取り組んでいる。ハッカの用途は、医薬品、化学薬品、香料など各種化学工業の原料となる。メンソレータムや仁丹などの、あのスツとする成分である。滝上町産は、安全・安心な国産品として、主に医薬品に使用されているとのこと。

また、歯磨き粉、化粧品、酒など



ハーブガーデン

の日用品にも使用され、最近では、スプレーとして町の特産品となっている。

町の東方に位置する香りの里ハーブガーデンには、八〇種におよぶハッカのほかミントやラベンダー・チャイブなど、四haの敷地内に約三〇〇種類のハーブが植えられ、丘の上に立つ北欧風のフレグランスハウスでは、ハーブティーはもちろん、ケーキや軽食が楽しめ、ポプリやリース、石鹸作りなどのハーブクラフトが体験できる。

ハッカという特産物を守り、さらにその香りを体感できることも、この町の自慢すべきひとつである。

### 3. 森の香るマチ

滝上町は、林業の町でもある。大正時代の関東大震災復興用、昭和に入り満州



事変の軍需用、洞爺丸台風による風倒木処理など町の林業は、社会情勢とともに発展してきた。いまでも基幹産業であり、木材・木製品製造業は、町の産業の七割弱を占める。家具づくりも盛んであるが、特産品としては、今では貴重な「ばっこ柳まな板」、そしてバイオオマスエネルギーとなる燃料ペレットなど種々の自慢の逸品がある。

そんな森に囲まれた滝上町には、美しい日本の歩きたくなる道五〇〇選にも選ばれた錦仙峡遊歩道がある。錦仙峡は、市街地の中を流れる全国でも珍しい渓谷で、森の香りや大小様々な滝が楽しめる。夏から秋にかけて、桂の甘いキャラメルのような香りが、散策するものの心や体をリフレッシュしてくれる。林業の町らし



錦仙峡(キンセンキョウ)

く、遊歩道はウッドチップ舗装であり、足にやさしく散策者を誘ってくれる。森の香りと四季折々豊かな表情が、人々の心を癒してくれる町である。

### 4. 童話村を キャッチフレーズに

そんな様々な香りが体感できる町にも、道内各地にみられる人口減少の波は進展してきている。人口減少は、町村部だけでなく、都市部も楽観できない日本全体を飲み込む激流のようなものである。少子化・財政難・経済停滞など、人々の暮らしに対する不安も加速要因となってい

るのではないだろうか。何の手立てもなく、意識も変えないままでは流れは止められない。当事者意識を持ち何かを始めなければ、流れは変わらない。変えられなくとも、流れが緩やかにはなるであろう。

滝上町は、『人いきいき、町わくわく「童話村」たきのうえ』というキャッチフレーズを生み出し、素朴でちよつぴりおシャレなまちづくりを目指し、この流れに立ち向かっている。滝上町が持つ森、川、畑などの豊かな自然や風景、花と香り、小動物などがイメージできる地形や条件は、様々な童話の舞台のようであり、いつの時代でも世界中のどんな地域でも、そして子供から大人までも愛され続ける童話と同じように、いつまでも愛され、色あせないまちづくりのため、住民の意識改革、発想の転換、自治体の企業戦略を進めている。

決して、おとぎの国を再現したような箱物のテーマパークなどではない。

## 5. 「芝ざくらの妖精 ピコロ」とともに

芝ざくらをひと振りすると、たちまち願いを叶える「芝ざくらの妖精 ピコロ」。ゆるキヤラ登場ですべて解決ではなく、願いを込めるシンボルキヤラなのである。ピコロには、町に住む人がいきいきとし、訪れる人がわくわくするような話題性のある楽しい町にしようという願いが込められている。住む人がいきいきとするような取り組みであれば、たとえば、芝ざくらの維持管理のボランティア、ハツカという歴史的農産物の継承、ハーブやウッドクラフトの加工体験支援など、さまざまな身近な取り組みもすべて童話村のまちづくりとなる。小さくても「きらり」と光るまちづくり、決して「色あせない」まちづくりが童話村である。また、町としても、まちづくり景観条例を制定し、建物の色彩統一事業、廃屋の解体撤去事業、宅地の景観整備事業を推進し、童話村の豊かな自然や景観が



滝上町のシンボル「虹の橋」

いつまでも守り愛され続け、一度訪れた人が一〇年後、二〇年後再訪時、あの時よりもずっと美しい町になったと言われるような取り組みを実施している。

- 郷土を愛し、美しいまちにします。
- 元気で働き、豊かな町にします。
- きまりを守り、明るいまちにします。
- たがいに助け合い、あたたかなまちにします。

○文化を高め、楽しいまちにします。

(滝上町町民憲章より)

いつまでも住み続けたいと思えるひとづくり、まちづくりは雄大な渚滑川の流れるように永遠のものであり、虹の橋を越え今後も人々に渡りつがれる。

### 〈取材後記〉

滝上町出身の有名人では、小説家の小檜山博先生が思い浮かぶ。JR北海道の車内誌のエッセイで、よく子供のころの話など掲載されている。どの地域にも共通する厳しかった頃の苦労話や逸話がある。豊かになつた現在からは考えられない事柄も多いが、思い出として記憶されているのだろう。どの世代のどんな人でも忘れられない風景、そして親や周りの人との交流のエピソードが胸に刻まれているものだ。ただ、褒められたことより、叱られた記憶が多いのはなぜであろう。

一般社団法人 北海道地域農研農業研究所

事務局長 片岡省二